

戦時下における「洋装」文化への即応と抵抗

——服飾雑誌『装苑』を通じて——

白石 優生
(玉井研究会 4 年)

- I 序 文
- II 『装苑』の概要
 - 1 『装苑』発刊の目的と変遷
 - 2 誌面の内容と特徴
- III 戦前・戦時『装苑』期について
 - 1 国策への即応
 - 2 非戦時的な側面
- IV 『服装文化』統合期について
 - 1 国策への即応
 - 2 非戦時的な側面
- V 結 語

I 序 文

「ぜいたくは敵だ」「パーマメントはやめましょう」、我々が戦前・戦時の日本を学ぶ中で、一度は目にしたことのある標語だろう。上記からイメージされる様に、第二次世界大戦へと向かう日本の国民は、総力戦体制によって質素儉約な生活を強いられた。現代において我々が常日頃気にしている「おしゃれ」とは無縁の世界だった、と言っても良いだろう。

しかし、人々の「おしゃれ」への思いは、完全に閉鎖されていたのだろうか。それを紐解く存在として、本稿は婦人向け服飾雑誌『装苑』を取り上げる。『装苑』

は文化服装学院の前身にあたる文化裁縫女学校の、すみれ会という学内機関が毎月発行していた機関誌である。学校そのものが服飾に関する研究を行っていたこともあり、『装苑』は当時としては珍しい日本製の婦人向け服飾雑誌として人気を博した。『装苑』の刊行時期を見ると、昭和11(1936)年4月に創刊され、昭和16(1941)年からは物資節約の影響で他雑誌と統合されつつも昭和19(1944)年まで刊行し続けた。さらに戦後では昭和21(1946)年に復刊を遂げ、現在まで発刊され続けている。質素儉約を強いられた第二次世界大戦期の日本において、『装苑』は生き残り続けた雑誌であることがわかる。

したがって、本稿は『装苑』の存在やその誌面内容を検討することで、なぜ婦人向け服飾雑誌が当時の日本で生き残ったのか、そこから浮かび上がる日本社会の様相はどの様なものなのか、服飾を取り巻く日本の姿を明らかにする。なお、戦前の『装苑』を扱った先行研究はあるが¹⁾、あくまでファッション誌の歴史としての掘り下げが強く、近代日本政治との関わりという面では十分な検討がされていないと言える。

論文の構成としては、次の通りである。第Ⅱ章では『装苑』の刊行目的や誌面の特徴、時代に応じた変遷を明らかにする。その上で、第Ⅲ章・第Ⅳ章では服飾に関する日本政府の意向(国策)とどの様に折り合いをつけていたのか、そうした国策から離れる非戦時的な服飾についてどの様に扱ったのか、戦前から太平洋戦争開戦前まで(Ⅲ章)と太平洋戦争時から終戦後(Ⅳ章)にわけて明らかにしていく。

なお、資料の引用に際しては、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに、漢字はすべて新字体に改め、踊り字はひらがなに直した。

Ⅱ 『装苑』の概要

1 『装苑』発刊の目的と変遷

まず『装苑』の発刊の目的について明らかにする。昭和11(1936)年4月に刊行された創刊号では、「月刊雑誌を発行して、学校の目的としてゐる服装の改善と、その普及とに力めたいと云ふので、今月から「装苑」を発行することにした」と述べられている²⁾。つまり「服装の改善と、その普及」が『装苑』の発刊目的であることがわかる。

さらに、「服装の改善と、その普及」とは具体的にどの様なことなのか、次の

様に説明している。まず、服装とはその時々や住んでいる国などによって変化するものであるため、その時最も適切なものを生み出す必要がある。しかしここで創造とは新しい物を一から作り出すと云うことではなく、従来からあるものをもっと良いものへと改善することを指している。したがって、当時の日本に合う様に「改善」する必要がある。そして、具体的な改善策としては服装の目的である実用と装飾に最もよく適する様にすること、この二つの目的に当てはまる様に合理化することである、と説明している³⁾。この「実用」と「装飾」の二つの着眼点は、その後の『装苑』の記事における重要な要素となっていた。特に、実用のことだけを考えれば全員の服を均一にすれば良いが、それは装飾と一般的には両立し辛い⁴⁾、という点に注目すべきだろう。『装苑』は戦争が直近となり物資統制が緊迫する中でも質素儉約とは言い難い“装飾”を目指す記事を掲載し続けた。その背景には実用と装飾の二面を両立するべきだという思いがあったのである。

次に『装苑』の変遷について整理する。『装苑』は大きくわけて三つの時期に分類することができる。

第1期は昭和11(1936)年4月から昭和16(1941)年8月までの5年間である⁵⁾。これは『装苑』が創刊されたのち、戦争の影響を受けて物資統制による雑誌統合を余儀なくされるまでの期間だ。

第2期は昭和16(1941)年11月から昭和19(1944)年2月までの2年間である⁶⁾。雑誌統合の影響を受けた文化服装学院は当時刊行していた『装苑』『服装文化』に『手芸と洋裁』を加えた3誌を統合し⁷⁾、『服装文化』という名前で新たに刊行した。戦後に発行された『装苑』の中には創刊〇周年を記念した企画が度々掲載されているが、昭和31(1956)年10月号の「創刊20周年記念特集」における回顧の中で、『服装文化』は雑誌合併を受けた『装苑』の改題であると述べられている⁸⁾。したがって名前は異なるが、本稿は『服装文化』も『装苑』の一部であるとして扱っていく⁹⁾。

第3期は昭和21(1946)年7月から現代までの戦後期である。昭和20(1945)年8月に日本は降伏し第二次世界大戦が終結するが、その1年後に『装苑』は復刊した。なお本稿は昭和日本の、特に戦争と関連する期間を調査の軸としているため、当該期については復刊後の7月号と8月号のみを考察対象とした。

したがって上記の時代的特徴を踏まえ、以下では第1期を戦前・戦時『装苑』期、第2期を『服装文化』統合期、第3期を戦後『装苑』期として扱っていく。

なお、当時の日本は和装と洋装が混在した社会であった。こうした状況下で『装苑』の理想とする服装とは和装と洋装のどちらであるのか。『装苑』はこの点について明確に、“洋装が相応しい”と主張している。例えば昭和11(1936)年5月号では、「近頃、国体精神の復興に連れて、婦人の洋装のすたる傾向が見える。(中略) 婦人には、やはり在来の和服の方がふさはしいと云ふ、国粹の見地からの考へであらう。が、これは誤りである」「真の日本婦人に適するやうに、洋服をつくれれば、西洋婦人にも優れた姿の美を発揚し得るに違いない。此の意味から私は、日本婦人が一人でも多く洋装されんことを熱望している」と述べている¹⁰⁾。当時の日本では、安易な西洋化に疑問が持たれ、日本的なものを重視する国粹主義的な思想が強くなっていた。洋装よりも和装が好まれる傾向にあったこうした時代の中で、『装苑』がはっきりと洋装を着るべきだと主張している点は特筆すべきだろう。

最後に、この時代の日本は洋装発祥の地とも言える国々と敵対関係になっていく。そのため『装苑』は敵国の服装を取り入れることを推奨しているとも受け取れる。しかしその点について『装苑』は、昭和12(1937)年12月号で「外国の流行紹介は遠慮いたしません」と断言している¹¹⁾。洋服の起源は確かに欧米であるが、それを日本のものとして受容し新たな日本の流行として作り上げると『装苑』は一貫して主張しており、時局が悪化する中でもそうした思いが記事の中に現れていた。実際に同時代では男性のスーツや軍服など、カテゴリーとしては洋服だが日本の文化になっているものも存在していた。一見すると洋服は非日本的だが、既に日本の一部になっている現実があった。『装苑』の誌面からは、非日本的なものとして完全に排除するのではなく、そうした存在を扱うことが許容される素地が当時の日本社会に残っていたことを看取できる。

2 誌面の内容と特徴

本節では、『装苑』の大まかな内容について整理していく。まず、雑誌としての特徴だが全期間を通して30ページ前後と比較的薄いものであった。戦後による回顧では、「パンフレットの様な雑誌」と表現されている¹²⁾。値段については、創刊当初は1冊10銭、昭和12(1937)年からは12銭であった。この値段設定について回顧の中では、「なにしろ10銭といえはキャラメル一個の値段だったのです。創刊の主旨に従って営利を離れた値段といえましょう」と述べられており¹³⁾、その破格さがわかる。なお『服装文化』統合後は1冊30銭で販売されており、戦後

の復刊第1号は5円という値段設定であった。

次に誌面についてだが、巻頭には論説が掲載されることが多かった。先述した「発刊の辞」や「国体精神の復興と婦人の洋装」は各号の巻頭に掲載された論説の例である。時局が悪化し、戦時の空気が漂い始めると「銃後を護る洋裁家に望む」という題で銃後の女性の服装はどの様にあるべきか説かれていたり¹⁴⁾、「女性の報国運動 女性報国総動員—精神力の耐久が第一—」という題で国民精神総動員運動に基づく日本女性のあり方が説かれたり¹⁵⁾、と戦時体制に即応する硬質の文章が多くなっていった。

こうした女性や服飾に関する論説記事は時局の悪化に伴い増加する傾向にあり、そのどれもが前半のページに掲載されていた。『服装文化』統合期にはそうした傾向がより顕著になり、「戦時体制下の婦人の服装」や「婦人標準服の着丈について」など、標準服やモンペといった戦時下の女性の服装について取り扱う論説記事が多数掲載されていた¹⁶⁾。

中盤の記事には、「グラフ」と題して絵や写真付きで流行のファッションを紹介する記事や、論説記事ではあるが写真や絵を組み込みつつ着こなし方を紹介する記事など、視覚的に目を引く記事が掲載される傾向にあった。詳しくは本稿第Ⅱ・Ⅲ章にて詳しく扱うが、例えば昭和12(1937)年11月号の「グラフ」では仕事着として図1の様な絵が紹介されていた¹⁷⁾。戦時下においては銃後の女性の働きが期待されていたこともあり、動きやすさを兼ね備えた仕事服が絵を通じて数多く紹介されていたことは特筆すべきだろう。これらは『服装文化』統合期にも「口絵」として巻頭に掲載される様になり、廃刊に至るまで継続された。また、中盤から終盤にかけての記事の特徴として、型紙の掲載がほぼ毎号されている点は特筆すべきだろう。時局の悪化による物資不足も後押しして、当時の日本社会では自前の古服や布を用いて服を作る文化が強かった。そのため現代のファッション誌とは異なって、『装苑』も型紙を数多く掲載しており、この点についても本稿第Ⅲ・Ⅳ章で詳しく扱いたい。

なお戦後『装苑』期の特徴としては、論説記事や創作関係記事などは時局悪化前から大きな変化は見られなかったが、一点注目すべき点として、巻頭に「スタ



図1

イル紹介」として数多くの口絵が掲載されていることが挙げられる。この巻頭に絵を掲載する形式は『服装文化』統合期から見られていたが、ページ数で換算するとおよそ倍以上とその量は大幅に増加していた。その内容も「ブラウスとスカート」「新生婦人服絵集」「アメリカ流行スケッチ」などであり、こうした復刊号の内容からは戦後の日本に新たな希望を見出し、再び服装の改善を目指そうとする開放感が見て取れた¹⁸⁾。

以上、『装苑』の沿革について明らかにした。現代におけるファッション誌イメージとは異なり、論説記事が多く掲載されていたこと、その内容は時局に強く反映されていたことがわかった。また服装を視覚的に紹介する記事は当時も存在している一方で、型紙などを通して自前での服作りを後押しする記事が多かったことが明らかとなった。

こうした特徴を持つ『装苑』であるが、上記でも見てきたように戦争の影響を強く受けている。こうした戦時において『装苑』は、生き残るために国策に即応する面はもちろんだが、それとは別に非戦時的な記事も掲載を続けていた。本章の内容を踏まえて、以下では国策に即応し戦時色を反映した内容の記事、非戦時と受け取れる記事について、第三章では戦前・戦時『装苑』期の特徴を、第四章では『服装文化』統合期の特徴を、それぞれ詳しく見ていく。

Ⅲ 戦前・戦時『装苑』期について

1 国策への即応

前章でも触れた様に、『装苑』は戦争へと向かう時局の影響を強く受けていた。そうした中で雑誌としての刊行を続けるためには、平時と同様の内容を継続することは厳しくなってくる。したがって本節では、日本政府の意向に対して、『装苑』はどの様に時局に同調する姿を見せていたのか明らかにしていく。具体的には記事数の多い、国民精神総動員運動、代用品、国民服・標準服の3点を取り上げる。

一つ目は国民精神総動員運動である。これは昭和12(1937)年8月24日に当時の近衛文磨内閣によって閣議決定されたものである。同日には「拳国一致堅忍不拔の精神をもって、現下の時局に対処すると共に今後持続すべき時難を克服して、愈よ皇運を扶翼するため官民一体となりて一大国民運動を起こさんとす」¹⁹⁾と発表され、日中戦争に向けて特に精神面での国民の協力を仰ぐものであった²⁰⁾。

『装苑』では同年9月号以降、誌面内容に戦時色が強くなり始め、前述した「銃後を護る洋裁家に望む」や「女性の報国運動 女性報国総動員一精神力の耐久が第一」、「女性の報国運動 飛行機献納運動」といった記事が登場し始める²¹⁾。その内容は様々だが、日中戦争下銃後の国民はどのようにあるべきか、という主題は概ね共通していた。『装苑』は婦人向け服飾雑誌であることから、服飾はどうあるべきか、女性はどうかあるべきか、といった点がより強調されていた。

例えば「銃後を護る洋裁家に望む」では、「祖国を護るべく残された者も、戦場に在る人と同様、重い任務を負ってゐることを覚悟せねばならぬ時ですこの非常時の女性の服装は、実用的価値に立脚し、経済―家庭経済よりはむしろ国家経済にまで考えを及ぼして行かねばならぬと思ひます」と前置きした上で、第一次世界大戦時における銃後のパリでは「空襲におびえて社交どころではありませんでした。能ふ限りの簡単な服、必要に迫られた衣服に過ぎなかったのです」と紹介されており、銃後において質素な服装を強いられることを受け入れるべきとの意図を看取できる。その上で、「今日、我々は今の我我にふさはしい服装を流行させるべきではありませんか（中略）幸にも日本女性は、マドリッドの婦人のやうに、銃を取って立つ必要に迫られてゐないのですから、せめて銃後の婦人らしい雄々しいスタイル、経済的で働き易く、しかも何処かに女性らしい優しさのある服装を考え、その普及に尽すことは、洋装に携はる者の報国の一つだ」と結論付けている²²⁾。こうした文面から、戦争や国民精神総動員運動により生活空間が戦時へと移行した日本女性に対して、不平を言うことを牽制する一方で、『装苑』の目的である服装の改善という点において、時局に合わせて最適な服装を模索することが必要であると、自身や関係者を肯定・鼓舞する面が見て取れる。

また「女性の報国運動 飛行機献納運動」では、今日の戦争における空軍の重要性、あるいは日本空軍が列強各国には未だ劣っている点などを指摘した上で、「毛糸製品○毛織物の不用品を集め、それをお金に換えて飛行機を製作させ、国家に献納しやう」という運動を「全く婦人にふさわしい報国運動ではありませんか。文化服装学院でもバザーの売品制作に当り、この運動に加わることになりました。すみれ会の会員方や、本誌の読者方も御参加なさるやうおすすめいたします」と、案件紹介のような記事を掲載している²³⁾。こうした記事では、読者や関係者に銃後の務めとしてすべきことを説くと同時に、学園の存在意義を示唆する内容が含まれている。こうした点で、国策に即応し時代を生き残ろうとする『装苑』の姿が見て取れる。



図2

なお、国民精神総動員運動に関連して注目すべき点として、同時期以降上記のような記事のヘッダーやフッターに大きな見出しが入るようになったことである。例えば図2のように「飛行機献納運動」のヘッダーには黒地に白抜きで「女性の報国運動」と帯状見出しが入り、目を引く構成となっている²⁴⁾。他にも、昭和13(1938年)9月号では図3の様に「国民精神総動員」の文字を囲したマークが目目を引くフッターとして大書されている²⁵⁾。国民精神総動員運動によって記事の内容に変化があったことはもちろんだが、誌面の作り方、特に序盤に掲載されがちな論説文のフォーマットに変更がなされていることは特筆すべきだろう。他方で昭和15(1940)年以降には、図4のように誌面内だけではなく表紙にも、「国民精神総動員」をはじめとして「大政翼賛」や「奉祝皇紀二千六百年」などが強調されていた²⁶⁾。この様に国民精神総動員運動に関連して『装苑』の誌面構成、特にヘッダーやフッターの見出しの大書の変化にも注目すべきであろう。

二つ目は代用品についてである。同時代の日本において、戦時における物資節約の影響は代用品という形で現れる。つまり、従来まで使用していた素材が希少になったため、代わりにの素材を使用することが奨励された。服飾は優れたデザインが考案されても、それを形作る素材がなくては話にならない。したがって、従来とは異なる代用素材を用いた服作りが企画されるが、この代用となる素材が果たしてそれまでの素材に見劣りしないのか否かということが盛んに議論されるよ



図 3

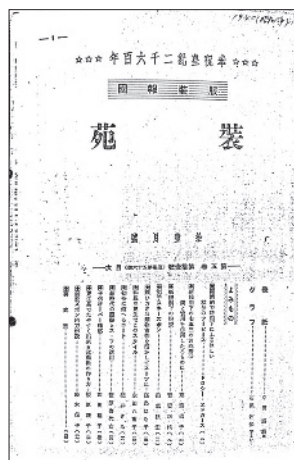


図 4

うになった。『装苑』も同様であり、特に綿繊維の代用品として登場したステープル・ファイバー（通称スフ）について取り扱う記事が登場する。ステープルファイバーとは綿や毛の代わりに用いられた人工繊維のことである。綿花や毛織物の消費を抑えるために、昭和12（1937）年11月からは「ステープル・ファイバー等混用規則」が、同年12月には「綿製品ステープル・ファイバー等混用規則」や「毛製品ステープル・ファイバー等混用規則」が公布され、スフの混ざった織物の使用が求められることとなった²⁷⁾。

昭和13（1938）年3月号には「ステープル・ファイバーの性状と取扱ひ方」という記事が掲載され、スフの素材について、従来の素材と異なる点やそれに伴う注意点、はたまたスフは劣悪な代用品なのかどうか、という点について説明が行われている。まず書き出しでは、年頭の百貨店や呉服屋で木綿や純毛織物が買い占めされた話などを取り上げ、「それほどまでにステープル・ファイバーとは品質の悪いものか、といふに、決してさう軽蔑することはありません。いくら戦時経済、非常時といつても、みすみす国民に大きい損失を与えるような政策を講じる訳がないぢやありませんか」と、読者を戒めるような言い方をしている²⁸⁾。その上でスフの特徴について「まだ研究途上にあるものですから欠点ではありますが、追々改良進歩して行きますから、実用には決して不適當なものではありません。私達はこれを上手に活かした使ひ方を考へることが任務だと存じます」と肯定的

に評価し、「本号では先ず取扱上の注意を揚げます」と特に洗濯方法について事細かな説明がなされていた²⁹⁾。具体的にはスフは水に弱い素材であるため、その劣悪性が世間で話題となっていたが、濡れている際に手荒に扱うことを避ければ大丈夫であると説いている。

こうした内容から、世間では劣悪品として忌避される傾向にあったスフを、『装苑』は肯定的に捉え、今後の進歩に期待できること、扱い方を誤らなければ大丈夫なことを読者に説明していた。このように『装苑』がスフを肯定的に捉えて紹介する背景には、国策の影響があるだろう。同年の前号では「いよいよス・フ時代に入らうとしてゐます。種々の欠点も、使ひ方を工夫することによつて補ひがつけば、それは国家のためといつてよいでせう。これこそ洋裁報国ではありますまいか」と、前節の国民精神総動員運動に関連して使用されていた“報国”という単語とともにスフが語られており³⁰⁾、スフを通じて国策への即応を示していると推察される。

他方で、スフを肯定的に捉えようとする背景には国策だけではなく、『装苑』関係者の願いも内包されていたのではないだろうか。これまで見てきたように、『装苑』は今の時代に適した新しいスタイルを生み出すことで服装の改善に努めようとしていた面がある。繰り返しになるが、戦前『装苑』の発刊の辞では、“服装とはその時々や住んでいる国などによって変化するもの”であるため、その時最も適切なものを創造する必要がある、と述べられている³¹⁾。つまり、スフの使用が強いられた同時代においては、スフを用いた服飾が最も適切とされ、その変化を受け入れることが求められていた。したがって、国策への即応という面はありながらも、代用品、特にスフに関する議論については、厳しい状況の中でもそうした素材を扱いきって見せることが自身の使命であると捉えていたことが推察される。

三つ目は国民服・標準服についてである。国民服とは、国民精神総動員運動の一環として昭和15(1940)年に取り決められた服装であり、資源節約や国威発揚を目的として制定された、いわば国民の制服的存在である。なおここでの国民服とは男性向けのものを指している。当初は男性用の国民服が制定され、その後昭和17(1942)年に女性向けの国民服として婦人標準服が制定された³²⁾。したがって、以下では男性向けの統一服を国民服、女性向けの統一服を標準服として扱っていく。

まず国民服についてであるが、そもそも『装苑』は婦人向けの服飾雑誌である

ため、その数はそれほど多くない。しかし全くないわけではなく、戦前・戦時『装苑』期に複数の記事を確認できた。国民服の話題が『装苑』に登場し始めたのは昭和13（1938）年からであり、同年7月号には「国民服とは―厚生省事務官丹羽喬四郎氏にきく」と題して、厚生省の事務官が構想する国民服とその目的を語る記事が掲載されている。しかし、当該期はまだ構想段階であり、国民服が具体化するのとは後のことである。したがって「結局斯様な考へから発足した思ひ付で「それは面白からう」といふ様な所から目下研究中の問題であると考へて頂き度いのです」と述べられている³³⁾。

なお国民服のデザイン案は大々的に公募が行われていたため、一般の側からその策定や普及に関わることのできる余地が存在していた。その影響からか『装苑』では具体的な国民服に関する記事が散見された。例えば昭和14（1939）年11月には、被服協会を中心に東京日日・大阪毎日主催で国民服の作品募集が実施されたが、それに対して「本学院研究部に於ても直ちに部会を開催し、概要項を逐条検討研究せる結果、研究部としても進んでこれに応募出品することに意見の一致を看たる」と、積極的に動いていたことがわかる³⁴⁾。

なお、標準服についてであるが、これは制定時期が昭和17（1942）年であるため『服装文化』統合期に数多くの記事を見ることができる。そのため、詳しい説明は次章に譲りたい。

2 非戦時的な側面

前章で見てきた様に、『装苑』の目的とする服装の改善には実用面だけでなく装飾面での最適化も含まれていた。そのため、些か実用面のみに偏っていると思われるものに対しては装飾面でのアレンジを提案することで、二点の両立を図ろうとしていた。本節で取り扱うのは、そうした“装飾”に関しての特徴的な記事である。

まずは型紙の存在である。これは資源節約という面で国策的だとも言える。しかし特徴的なのは、型紙を通して“装飾”面の充実を意図していることであった。国策的な、国民服・標準服をはじめとした質素な服装の型紙も多数掲載されていたが、本節ではそれとは異なる美を意識した型紙について扱っていきたい。

そもそも『装苑』は服飾に関する学校の機関誌であるため、学内での服飾に関する研究を紹介する意図もあって、創刊時から型紙などを通じた研究報告記事が掲載されていた。そうした型紙は時局の悪化に伴い、誌面の占める割合を増やす

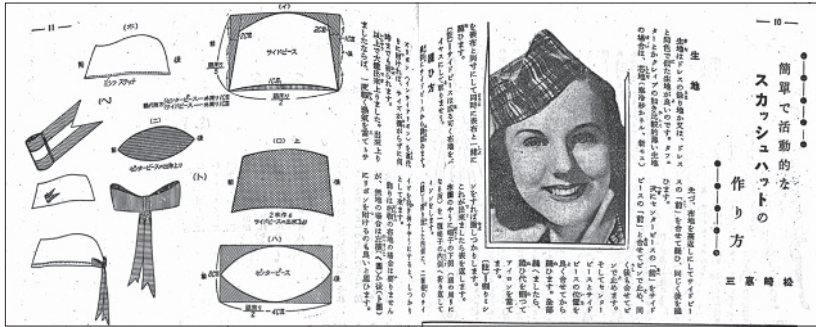


図5

ようになる。この背景には、物資節約という戦時下の社会情勢が大きく影響しているだろう。ただしこの時掲載された型紙は素朴なその場しのぎの服作りを推奨するものではなかった。むしろ古布を用いて服を作るべき時期であるからこそお洒落な洋装を自作してみてもどうか、という意図を持っていたことがわかる。例えば、昭和13(1938)年11月号に掲載された「秋のアンサンブル」³⁵⁾では、ツーピースドレス、タップコート、スカートの3点の型紙を提示し、洋装を組み合わせた着こなし方を紹介している³⁶⁾。

上記の様な特徴を持つ型紙記事であるが、特筆すべき点として紹介している衣服や雑貨の多様性が挙げられる。具体的には、ワンピースやツーピース、スカートやブラウスといった定番の衣服や雑貨はもちろんだが、レインコートやホームドレス、ランジェリーや帽子といったものまで総合的に取り扱っている。例えば、図5は昭和14(1939)年7月号に掲載されたスカッシュハットの作り方である³⁷⁾。ドレスの余り生地を有効活用してみてもどうか、という趣旨で掲載された同記事だが、衣服の中で必需品とは言えない帽子まで扱っていることから、『装苑』の扱う服飾の多様性がわかる。こうした型紙記事の数々は全て日中戦争が開始した昭和12(1937)年以降に見られたものであり、昭和21(1941)の雑誌統合まで掲載が途切れることはなかった。

また、型紙ではないが戦前・戦時『装苑』期には編み物を通じた小物の作り方も多数紹介されている。例えば、昭和14(1939)年には6月号から8月号にかけて「絹糸の編物各種」と題して銀貨入れやハンドバック、ベルトの編み方を「最も実用向きで、而も雅致³⁸⁾に富んだ物」として紹介する記事が掲載されている³⁹⁾。物資不足により必要最低限の衣服のみの生活を強いられた戦時下であるが、当該



図 6

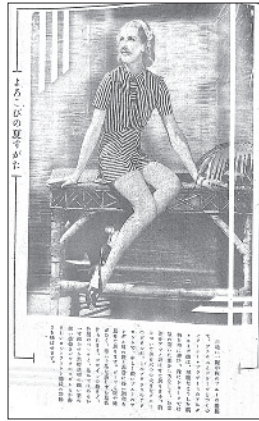


図 7



図 8

期には帽子をはじめとした小物に目をつけ、使用することも十分可能であったことは注目すべきだろう。

以上、『装苑』に掲載された型紙記事を見てきた。そこには洋装の普及に努めるものや風情のある小物の自作を紹介するものなど、物資統制に悩まされる戦時下でありながらも実用に加えて装飾面でも充実した服装目指す姿が現れていた。

次に絵や写真の存在である。我々が服飾雑誌に対して思い浮かべるものは、様々なモデルが衣装を身に纏った写真の掲載された雑誌だろう。『装苑』はそうした現代のファッション誌と完全に同じではなかったが、論説記事や型紙記事の他に写真や絵を掲載するスペースが毎号設けられていた。

戦前・戦時『装苑』期の絵・写真であるが、先述した図1の様な絵や、図6の様な写真がほぼ毎号にわたり掲載されていた⁴⁰⁾。特に、図6の写真は外国人女性をモデルにしたものである。扱う服装が洋装であることから、外国人モデルの姿が戦時下でありながらも記事内に登場していたことは特筆すべき点だろう。同号の編集後記では、時局の悪化に伴い諸外国の動向に目が向きがちな中ではあるが「外国の流行紹介は遠慮いたしません」と敢えて主張していることから⁴¹⁾、服装の改善のために洋装を普及する手を緩めなかった『装苑』の強い意志が看取できる。しかし、翌年昭和13年（1938）年6月号に掲載された図7の写真以降、外国人モデルの写真が使用されることはなくなった⁴²⁾。以後装飾の充実を目指す記事は絵の割合が増加する⁴³⁾。図8はその一例だが、こうした絵の特徴として、顔

は日本人であるが、外国人の様な細身で長身の女性像が描かれていたこと、が挙げられる。最新の洋装の紹介には外国人モデルが最適であるが、彼女らをモデルにした記事を掲載することが厳しくなっていたことが想像される。しかし、そうした状況の中でも、視覚に訴えての紹介を維持しようとしていた。苦しい状況ながらも世情に流されず、洋装を本来の姿で読者に示そうと苦闘する『装苑』の編集方針を看取できる。

以上、本章では国民精神総動員運動以降の時代を中心に、代用品や国民服・標準服に着目し、戦前・戦時の『装苑』がどのように国策に即応してきたかを明らかにした。厳しい制約が課された戦時下において、廃刊を強いられる可能性の高い服飾雑誌である『装苑』が生き残り続けた背景には、こうした国策への呼応がある。特に女性向けの服飾雑誌だからこそ、銃後の女性に対して国策の普及を推進することが可能であるとの立場を上手く活用しながら活動を継続していた。しかも、その中で、実用に終始することなく装飾の面も充実させようと尽力していた点は注目すべきだろう。型紙記事を通して多様な服飾雑貨の作成を推奨していた点、絵や写真を用いて視覚的に洋装の着こなしを紹介していた点などは、戦局が悪化する中でも常に見られた『装苑』の特徴である。時代に即応しながらも妥協をしない『装苑』のこうした姿は、雑誌統合後にも数多く見られた。次章では『服装文化』統合後の国策に即応した記事と、非戦時的な記事の共存について紹介する。

IV 『服装文化』統合期について

本章では、前章と比較して『服装文化』統合期の誌面を明らかにしていく。それを踏まえて最後には、戦後『装苑』期の様子についても触れていく。

1 国策への即応

まずは国策に即応する記事についてである。『服装文化』統合期の特徴として、標準服を数多く取り上げていることが挙げられる。本稿が調査対象として取り扱った『服装文化』は全部で28冊だが、そのうち標準服に関する記事が見られなかったものは4冊しかない。さらに、その中には子供服特集といった、標準服からは少し離れたテーマで発行されたものもあった。したがって、標準服は『服装文化』における重要なテーマの一つであったことがわかる。例えば、昭和17(1942)

年4月号は標準服制定後間もない時期であり、「婦人標準服特輯号」と銘打って発刊されている。掲載された論説記事では標準服の制定に賛意を示すとともに「尚この婦人標準服の発達普及のため職域奉公を期する次第である」と宣言している⁴⁴⁾。同号は他にも「婦人標準服の作り方」でその創作方法が掲載されていたり、「婦人標準服型式」で妊婦向けや儀礼向けの標準服について紹介していたり、と充実した内容となっている⁴⁵⁾。

このように『服装文化』は標準服の普及に力を入れる誌面づくりをしている。しかし、標準服はなかなか普及に至らなかった。そのため、『服装文化』は翌年昭和18(1943)年4月号にて「新日本婦人服紹介号」と銘打ち再度特集を組むなど尽力している。その編輯後記では「今月号は御覧の様に内容も一変して婦人標準服の普及の為に、強力なる実行運動を促す為の特別編輯を致しました。当局の意を体して一日も早く戦時衣服にぬぎかへられる様祈ってやみません」と、標準服の普及を半ば祈るかの様な訴えをしていたことが印象的である⁴⁶⁾。こうした文面からは、標準服の普及という国策に基づいた行動に『服装文化』が尽力している姿が推察される。その背景には時代に応じた服装を創造する機会であった、という点が含まれているだろう。女性の服飾をターゲットにしている『服装文化』にとっては、服装の改善という大きな変化をもたらすチャンスとしてかなり肯定的に捉えられていたとも言える。

しかしその一方で、『服装文化』の誌面上では、普及が順調には進まなかった標準服の現実を窺わせていた。そもそも『服装文化』は標準服に関する国の考えや決定に対して、全面的に恭順していたわけではなかった。標準服が普及していなかった要因として、そのデザインが同時代の人々の美意識にそぐわなかった事が考えられる。図9は昭和17年4月号に掲載された標準服の口絵一覧であるが、その質素さがよくわかるだろう。実際にその質素さに言及した記事も掲載されており、例えば昭和17(1942)年2月号の「婦人標準服審査の感想」では「今一步の奥行、即ち淡泊にして深みのある日本的な美しさの表現に乏しかった事に対してはなんとなく物足りない感じがした(中略)いかにその物が経済的に又機能本意に構成されたものでもここに優美性が欠如されて居るものであつてはならないと思ふ。どこまでも簡素の中的美しさを失はない様にと考へる事は、即ち被服文化の向上に資する事の大なるものである事を忘れてはならないと思ふ」と、物足りないデザインであり如何に実用的であっても優美性が欠けてはならないと苦言を呈している⁴⁷⁾。



図9

前章で触れたように『装苑』の目指す服装の改善には実用と装飾の二つの要素が重要視されており、上記はまさに装飾面の欠如を痛感している記事であろう。次節でも取り上げるが、『服装文化』は標準服の着こなし方やアレンジを紹介している。例えば、図10のように昭和18（1943）年6月号では「夏の標準服応用型」として暑さ対策も兼ねた標準服のアレンジを絵付きで紹介している⁴⁸⁾。その口絵は染色による標準服のカラーチェンジや刺繍を組み込んだおしゃれを提示しており、図9にある様な質素さはなくなっていることがわかる。同号が刊行されたのは太平洋戦争も終盤に差し掛かろうとする昭和18（1943）年の夏である。こうした装飾は、年々厳しくなっていく物資統制や質素儉約とは真逆の要素であり、そうした存在が戦時下でも掲載されていることは注目すべきだろう。

以上、標準服をめぐる『服装文化』の誌面の特徴について明らかにしていった。まず明確なこととして、『服装文化』は標準服の普及という国策に即応する姿勢を見せる誌面づくりをしていたことが挙げられる。こうした点に、服飾雑誌でありながら戦時も生き残り刊行を続けることができた一因を見ることができるだろう。その一方で、『服装文化』は政府の決定に対して完全に順応していたわけではなかった。特に『装苑』創刊の目的にあった実用と装飾の両方を兼ね備えた服装の改善を目指し、尽力する姿が標準服のアレンジ紹介から見て取れた。日本はドイツやイタリアといった国々と同盟を結び、国際社会を敵に回したため、全てを政府・軍部によってコントロールされるという全体主義国家的な側面が強かつ

たと考えられがちである。しかし、『服装文化』の様な一学園の雑誌が国策に対して従順な面を見せながらも、苦言を呈する場面が多々存在していたことは、上記のイメージから離れたものである。こうした側面を次節でみていく。

2 非戦時的な側面

ここでは、戦争が急迫する中、『服装文化』がそれでもなお装飾を追求していたこと、すなわち非戦時的な内容と目される記事を掲載していたことを紹介してみたい。『服装文化』統合期における型紙記事についてだが、同記事は継続して誌面の多くを占める存在であった。しかし戦前・戦時『装苑』期と異なり、前節で扱った標準服を中心とする型紙記事が大半を占めた。そのため、多様な衣服や雑貨を紹介する余裕は当該期には薄れていったと考えていいだろう。しかし『服装文化』統合期においては、装飾に豊かな型紙記事が減少した反面、写真や絵による装飾関連記事が大幅に増加している。

『服装文化』統合期に掲載された絵・写真についてであるが、同時期では写真の割合が大きく減少したため、視覚情報記事としては絵により大半が行われていた。『服装文化』では巻頭の表紙と目次の間に「口絵」という形で絵が掲載された。これは戦前・戦時『装苑』期において、昭和15(1940)年以降グラフの掲載箇所が巻頭に移動した名残であろう。なおこうした口絵の特徴として、最後まで色付きで作成されたことが注目される。彩度や種類の衰えはあるが、廃刊となった昭和19(1944)年まで『服装文化』は色付きの絵を掲載し続けた。装飾の一要素として重要な色に関して、厳しい戦時下でも妥協をしなかった『服装文化』の姿は特筆すべきだろう。

この口絵の内容について、多かったのは標準服のアレンジの仕方を紹介するものである。標準服の質素さについては前節で述べたとおりであるが、『服装文化』はその様な標準服をいかに装飾化して着こなすか、というテーマについて積極的に取り組んでいた。例えば、昭和17(1942)年4月号では図9の標準服を紹介する記事が掲載されたが、その次頁には図11の絵が掲載されている。「婦人標準服の変化」と題された同記事では、前頁に掲載されたあまりに物足りない見た目の



図10

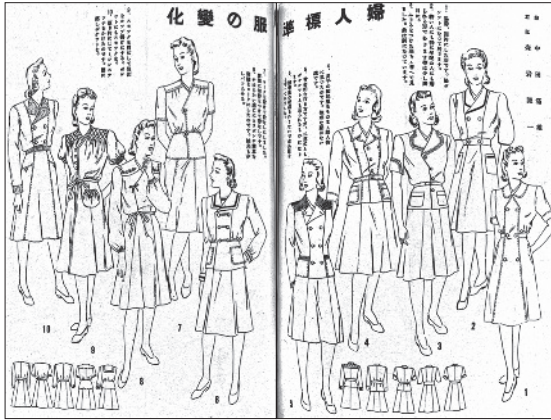


図11



図12



図13

標準服をいかにアレンジして美しく見せるか、という装飾の具体例を提示している⁴⁹⁾。「やはらかい感じにリボンや簡単な刺繍をヨークにしたものです。袖先も少しパフらせる」といった様に各デザインのポイントを解説していて、図9と見比べてその華やかさは一目瞭然だろう⁵⁰⁾。他にも、前章では図10の「夏の標準服応用型」を扱ったが、同記事には続きがありそこでは図12のように色付きの標準服のアレンジを紹介している⁵¹⁾。その一つを拡大したのが図13であるが、その



図14

キャプションには「用布は縮緬、肩の飾りはギャザーの上に葡萄の実型のアップリケ、胸と帯の留具は黄楊のほりもの」とあり、その装飾の豊さがわかる。同記事は戦局が悪化する昭和18（1943）年の記事であり、当該期にこれほどの装飾を推奨できたという点は注目に値する。技能的物資的な面で実際にこの様に標準服をアレンジできた読者がいたのか定かではないが、こうした絵の存在は戦時下でありながら非戦時的な空気を感じることができる貴重なものだったのではないだろうか。

また、標準服以外をテーマにした装飾に富んだ口絵も『服装文化』には多数掲載されていた。例えば図14は昭和18（1943）年3月号に掲載された口絵だが、これはそれまで春の上着として紹介していたロングコートを、物資削減の問題から短コートとして紹介している記事である⁵²⁾。同記事は物資削減という国策に応じて書かれている。しかし、その中身を見てみると、古洋服の記事を再利用した色とりどりコートの着こなしが並んでいる。そのキャプションでは、「更生すると、時により暗くなり易ぎて女性美がなくなることがあります。その時はこのやうに色糸を刺して明るくして下さい」といったアドバイスが書いてあり⁵³⁾、まさに物資削減という実用面と、手材料でいかに美しく見せるかという装飾面を両立させた、目指すべき姿が明確に現れていると言える。

以上、絵・写真を通して、『服装文化』がどの様に装飾面の充実を図ってきたのか見ていった。その背景にはもちろん戦時という大きな制約があるが、決して

実用のみの服装に満足することなく、与えられた状況下でいかに美しくみせるか追求し続けた姿を看取できる。無論そうした『服装文化』の目指すことが、実際の読者に実現可能なものであったのか定かではない。しかし『服装文化』が示していたこうした側面は、制限された生活を強いられた銃後の女性達の中での密かな楽しみとなっていたのではないだろうか。

最後に、終戦直後の『装苑』について扱い本章のまとめとしたい。前述した様に、『装苑』は終戦後1年余りで復刊を遂げる。そこには出版している学園側の尽力があっただろうが、読者である女性たちによる強い思いも内包されていたのではないだろうか。復刊第1号の創刊の辞では、学園長である遠藤政次郎が次の様に語っている。

戦争に負け悲惨の極みであるが「この時にあつて、唯一つ朗かな社会がある。それは、服装の研究にいそむ若い女性の層である。生活の合理化、新文化を目指し逞しい意欲で研究している。研究に理想があつて喜びがある。前途に光明がある。療原の火の如くという辞があるが、正にその研究熱はそれ以上であらう。都会も地方も別もなく、若い女性の総べてが燃えているかに見える。(中略) 私は、この若い女性の立ち上がる澆刺たる意気を知り、文化日本の建設に対し光明を見出し、心ひそかに喜びを禁じ得ない。日本国民は決して失神も虚脱もしていない。新文化に対するこの逞しい建設的な研究は有力な発明である。(中略) 本誌は、この、国として重要性のある服装研究の横縦の連絡者、正しい指導者として、燃え上がる若い女性をして、他の部門に魁けて服装文化を建てさせ、文化の先駆者たる栄光を担はせたい。服装文化によって悲愁と失望に暮れる国民に活を入れ、立ち上がる希望と意気を興え、新生日本のため微力を捧げたい」⁵⁴⁾と説いていた。

質素儉約を強いられた銃後の女性たちであるが、その内に秘める美への思いは決してなくなることはなかった。むしろ、そうした戦時下でも可能な限り自身の望む美を追い求めようとする『装苑』の姿勢は、終戦間際まで続けられていた。それ故にこそ、終戦後早期の復刊を遂げることができたのだろう。戦時中の日本では確かに閉鎖的な空間が構築されたが、それは日常を完全に制約する空虚なものではなかった。むしろ、できる限りで非戦時的な空気を楽しもうと、『装苑』の様な存在に想いを寄せていた。そして『装苑』は、国粋主義的な風潮や戦争の制約に負けることなく、洋装を通じて実用と装飾も満たした服装の改善を追い求め続けていたのである。

V 結 語

以上、戦前・戦時の日本において婦人向け服飾雑誌である『装苑』が生き残る姿を明らかにしてきた。

第Ⅱ章では、『装苑』の概要について整理した。現代のファッション誌に繋がる系譜を持つ雑誌ではあるが、当時の服飾雑誌には論説文も多数掲載され、そうした分野に戦争の影響が入り始めたことがわかった。また、『装苑』発刊の目的について整理することで、『装苑』が目指す服装の改善の姿、具体的には実用と装飾の両面を兼ね備えた服装を生み出すこと、が明らかとなった。この実用と装飾の両立は、第Ⅲ章・第Ⅳ章で扱う記事の特徴に強く反映されていた。他方で、『装苑』が和服＝国粹主義的で理想的だとする同時代の風潮に警鐘を鳴らしていたことも注目すべきだろう。西洋化に疑問が投げかけられ、日本的なものを見直しが進んでいた同時代において、『装苑』は最初に削除対象となることを警戒しなければならない存在である。しかし、同誌は他誌との統合を強いられながらも刊行を続け、最終的には戦争終結1年前の昭和19(1944)年まで生き残り続けたことは興味深い。戦争によって欧米列強を敵に回しながらも、完全に敵国の文化を悪だとして切り捨てられなかった、むしろ必要ともしていた日本の姿が、こうした『装苑』の存在から推察できる。

第Ⅲ章・第Ⅳ章では、まず国民精神総動員運動や代用品、国民服・標準服などの国策に関連して、『装苑』がどのような誌面や記事を展開していったのか明らかにした。そこからは、国策に賛同しその普及に尽力する『装苑』の姿が見て取れた。婦人向けの服飾雑誌という、戦時下において真っ先に廃刊が強いられる可能性のある同誌が終戦間近まで生き残ることができた背景には、こうした戦時に即応した『装苑』の姿勢が存在している。他方で、『装苑』は政府の意向だけを誌面に反映する従順な存在ではなく、戦時中であっても苦言を呈する場面もあった。

次に実用面に偏る同時代の服飾に対して、最後まで装飾との両立を追求した『装苑』の姿を浮き彫りにした。雑誌の前半に掲載されていたお堅い論説記事よりも、読者が求めていたのは、こうした視覚的にわかりやすく実用的な記事であろう。一見すると質素儉約に反している様な装飾の数々が掲載され続けたことから、『装苑』の存在は戦時日本社会の閉塞的な精神空間の中では異質であり、それは女性にとっては新鮮だったであろう。

またこれは、戦後『装苑』が1年余りで復刊を遂げたことも関係していたと考えて良いだろう。女性の解放や洋装文化の新たな萌芽に期待を膨らませていた戦後復刊号であるが、これほどまでに早く復刊できた背景には、国策に即応するだけの雑誌に成り下がらず、読者に需要のある記事を最後まで掲載し続けた同誌編集者、さらにはデザイナーが多く残っていたことが挙げられる。戦時下、そうした人材が一掃されていたなら、戦後早期の復刊は困難であったことは想像に難くない。

- 1) 具体的には、井上雅人「日本における「ファッション誌」生成の歴史化—『装苑』から『アンアン』まで／『ル・シャルマン』から『若い女性まで』」(都市文化研究(12)2010、125-138頁)、高橋知子「『装苑』における欧米ファッション情報の受容について—1936年から1959年」(愛知学泉大学研究論集(通号36)2002、153-162頁)、田中里尚「服飾雑誌『装苑』にみるアメリカ服飾流行の表象の変容：1930～1950年代を中心に」(文化学園大学紀要47：2016、1、69-82頁)などが挙げられる。また大正・昭和初期における女性の服装の流行については、吉武英莉「『モダンガール』再考—雑誌『女性』を通して—」(『政治学研究』61号、2019年、293-315頁)に詳しい。
- 2) 杉本正幸「発刊の辞」(『装苑』昭和11年4月創刊号2頁)。
- 3) 同上。
- 4) 同上。
- 5) 尚、本稿は『装苑』の調査のため、文化学園大学図書館を利用させていただいたが、同図書館では昭和13年5月号、昭和14年9月号、昭和15年3月号、昭和15年5月号が欠号であった。したがって、本稿は上記4冊を除いたものを『装苑』として扱っていることに留意されたい。
- 6) 『服装文化』については、昭和17年10月号が欠号であったため、それを除く27冊を本稿では『服装文化』と名を改めた『装苑』として扱うことに留意されたい。
- 7) 『服装文化』は昭和7年ごろからすみれ会が年3回ほどの季刊雑誌として発行していたスタイルブックである。また『手芸と洋裁』は手芸と洋裁社が月刊で発行していた雑誌である。(出典：遠藤政次郎「創刊20周年記念特集」(『装苑』昭和31年10月号223-227頁))。
- 8) 遠藤政次郎「創刊20周年記念特集」(『装苑』昭和31年10月号223-227頁)。
- 9) ただし統合前の『手芸と洋裁』『服装文化』の流れも同時に受け継いでいる点には注意すべきだろう。
- 10) 杉本正幸「国体精神の復興と婦人の洋装」(『装苑』昭和11年5月号2頁)。
- 11) 今泉静江「編輯後記」(『装苑』昭和12年12月号36頁)。
- 12) 前掲、遠藤「創刊20周年記念特集」。

- 13) 同上。
- 14) 遠藤政次郎「銃後を護る洋裁家に望む」(『装苑』昭和12年9月号2-3頁)。
- 15) 斎藤鹿三郎「女性の報国運動 女性報国総動員—精神力の耐久が第一—」(『装苑』昭和12年11月号2頁)。
- 16) 大妻コタカ「戦時体制下の婦人の服装」(『服装文化』昭和17年1月号14-15頁)。
遠藤政次郎「婦人標準服の着丈について」(『服装文化』昭和17年9月号6-7頁)。
- 17) 「グラフ 仕事着」(『装苑』昭和12年11月号20頁)。
- 18) 「スタイル集 (オフセット)」(『装苑』昭和21年7月創刊号)。
- 19) 「国民精神総動員 (官民一致猛運動へ)」(『読売新聞』昭和12年8月24日、第二夕刊1面)。
- 20) 参照：『日本大百科全書』、赤澤史朗「国民精神総動員運動」。
- 21) 前掲、遠藤「銃後を護る洋裁家に望む」。前掲、斎藤「女性の報国運動 女性報国総動員—精神力の耐久が第一—」。「女性の報国運動 飛行機献納運動」(『装苑』昭和12年10月号4-5頁)。
- 22) 前掲、遠藤「銃後を護る洋裁家に望む」。
- 23) 前掲、「女性の報国運動 飛行機献納運動」。
- 24) 同上。
- 25) 遠藤政次郎「再び服装の国家的研究指導機関の設置を望む」(『装苑』昭和13年9月号2-3頁)。
- 26) 図4は『装苑』昭和15年11月号目次。“大政翼賛”のキャプションは昭和16年1月号など数号。
- 27) 『商工行政史 下巻』(商工行政史刊行会、昭和30年、114頁)。
- 28) 「ステープル・ファイバーの性状と取扱ひ方」(『装苑』昭和13年3月号22-23頁)。
- 29) 同上。なお、ステープル・ファイバーをはじめとした戦時日本の代用品については、玉井清編『写真週報』とその時代(上)』(慶應義塾大学出版会、2017年)第三章に詳しい。
- 30) 今泉静江「編輯後記」(『装苑』昭和13年2月号38頁)。
- 31) 前掲、杉本「発刊の辞」。
- 32) 参照：『日本大百科全書』、森脇逸男「国民服」。
- 33) 「国民服とは—厚生省事務官丹羽喬四郎氏にきく」(『装苑』昭和13年7月号4頁)。
- 34) 文化服装学院研究部「国民服(男子服)の研究とその作品」(『装苑』昭和15年2月号18-19頁)。
- 35) ここでのアンサンブルとは、一揃い、という意味であり、ブラウス・スカート・ジャケットといった組み合わせや、ドレスにコートといった組み合わせなどを指している。
- 36) 若菜菜子「秋のアンサンブル」(『装苑』昭和13年11月12-13頁)。
- 37) 松崎恵三「簡単に活動的なスカッシュハットの作り方」(『装苑』昭和14年7月号10-11頁)。
- 38) 雅致とは、「風流な趣。みやびやかな風情」を意味する単語である。(出典：新

村出編『広辞苑 第七版』岩波書店、2021年、572頁)。

- 39) 荒川喜勢子「絹糸の編物各種 (1)」(『装苑』昭和14年6月号12-13頁)。
- 40) 前掲、「グラフ 仕事着」。「グラフ シックな冬の装い」(『装苑』昭和12年12月号17頁)。
- 41) 前掲、今泉「編輯後記」。
- 42) 「グラフ よろこびの夏すがた」(『装苑』昭和13年6月号17頁)。
- 43) 「グラフ」(『装苑』昭和15年10月号)。
- 44) 遠藤政次郎「婦人標準服とその指導機関」(『服装文化』昭和17年4月号10-11頁)。
- 45) 文化服装学院実習部「婦人標準服の作り方」(『服装文化』昭和17年4月号16頁)。
中島くに・荒海嵩子他「婦人標準服型式」(『服装文化』昭和17年4月号18-25頁)。
- 46) 「編輯後記」(『服装文化』昭和18年4月号36頁)。
- 47) 上田柳子「婦人標準服審査の感想」(『服装文化』昭和17年2月号9頁)。
- 48) 「口絵 夏の標準服応用型」(『服装文化』昭和18年6月号)。
- 49) 中田満雄絵・森岩謙一意匠「婦人標準服の変化」(『服装文化』昭和17年4月号)。
- 50) 同上。
- 51) 前掲、「口絵 夏の標準服応用型」。
- 52) 町田菊之助案・七里淺子「春外套の代用に更生品の上衣」(『服装文化』昭和18年3月号)。
- 53) 同上。
- 54) 遠藤政次郎「創刊の辞」(『装苑』昭和21年7月創刊号13頁)。